



Title	カンボジア語のʔaojと日本語の「サセル」の対照研究
Author(s)	ソック, ソワンロッター
Citation	日本語・日本文化研究. 2024, 34, p. 99-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101318
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カンボジア語のʔaoj と日本語の「サセル」の対照研究

ソック ソワンロッター

1. はじめに

「財布を落とした」という日本語の表現は、わざと財布を落としたのか、それとも、うっかり落としてしまったのか、どちらか分らない。一方、ソック (2023 : 136-137) は、カンボジア語では意志の有無によって表現を区別すると指摘した。わざと落とした場合は、tomleakⁱ〈落とす〉という語彙的な動詞で表現するが、うっかり落とした場合は、tvəə ʔaoj と tleak〈落ちる〉を組合せた複数の語で表現するⁱⁱ。

坂本 (1989) や上田 (2007) によると、うっかり落とした場合に用いられるカンボジア語の表現に現れている tvəə ʔaoj は使役表現であり、ʔaoj は単独でも使役表現として用いられる。使役の一般的な構文は〔使役者+tvəə ʔaoj/ʔaoj+被使役者+動詞〕である。以下に例を示す。

- (1) pəŋnaa ʔaoj koon riən piəsaa caponⁱⁱⁱ
パンニャ ʔaoj 子供 学ぶ 日本語
〈パンニャさんが子供に日本語を習わせる。〉

- (2) ruəŋ nih baan tvəə ʔaoj kɲom jòm
映画 これ 過去 tvəə ʔaoj 私 泣く
〈この映画は私を泣かせた。〉

(1) では、使役者のパンニャさんが被使役者の子供に指示や説得など、何らかの形で関わって、〈子供がカンボジア語を学ぶ〉という事象を引き起こしたことを表す。(2) では、映画という無生物の使役者が原因となり、〈私が泣く〉という事象が生じたことを表す。

日本語の使役は動詞に接尾辞「(サ)セル」を付加して表される。しかし、ʔaoj を用いたカンボジア語の文が必ずしも「サセル」で翻訳されるわけではない。以下のカンボジア語の例文 (3) を日本語に翻訳すると、「サセル」よりも「～テモラウ」の方が自然である。(＃は、当該の文が意図した意味や文脈と合わないことを示す。)

【分からないことをロットさん (能力のある人) に教えてもらおうとした場面】

- (3) cam ʔaoj raət bəŋriən
待つ^{iv} ʔaoj ロット 教える
〈ロットさんに教えてもらおうかな。〉
〈＃ロットさんに教えさせようかな。〉

(3) のように、カンボジア語のʔaoj と日本語の「サセル」がどのような場合に対応しないのかはまだ十分に解明されていない。そこで、本稿では先行研究考察・記述されているʔaoj と tvəə ʔaoj の使役表現を再検討し、日本語の「サセル」と対照させながら、類似点と相違点

を明らかにする。

2. 先行研究

カンボジア語の ?aoj と日本語の「サセル」について幅広く対照させた研究は管見の限り見当たらない。日本語の「サセル」の意味特徴については、先行研究や日本語教材で様々な解説がなされている。本章ではその中から安藤・小川(2001)と高見(2011)の研究を概観する。一方、カンボジア語の ?aoj は動詞として「与える」という意味があるが、動詞以外としてもよく使用され、いつかの用法を持っている(cf, Haiman 2011, Corre 2021)。使役も主要な用法の一つであるが、それについて詳述されている研究は少ない。本稿では、その中から福田(1977)と上田(2007)を取り上げ、 ?aoj がどのように考察されているかを概観する。

2.1. 「サセル」に関する先行研究

2.1.1. 安藤・小川(2001)

安藤・小川(2001)は、「サセル」の意味機能を強制、誘発、放置、許可、責任の五つに区別している。それぞれの解釈は、使役者と被使役者の関わり方による。例えば、使役者が被使役者の気持ちを尊重する場合には、許可や放置として解釈されるが、被使役者の気持ちを尊重しない場合には、強制として解釈される。

(4) どうしてもと言うので、娘を海外旅行に行かせた。 【許可】

(5) 隊長は、雪の中兵隊を無理矢理2時間も歩かせた。 【強制】

(安藤・小川 2001:28~30)

(4)の使役者は娘が海外旅行に行きたいという気持ちを尊重し、(5)の隊長である使役者は兵隊が歩きたいかどうかを尊重しない。被使役者の気持ちを尊重するかしないかによって、許可や放置と強制との区別ができる。

また、安藤・小川(2001)によると、使役者が被使役者の変化にどの程度積極的に関わるかによっても意味機能が変わる。積極的に関わる場合には、強制や許可の意味機能として解釈される一方、積極的に関わらない場合には、放置、誘発、責任の意味になると述べている。

2.1.2. 高見(2011)

高見(2011)は、「サセル」の意味機能を使役者の当該事象への関与が意志的か非意志的かによって区別する。意志的な用法は、強制、説得、指示、許容・放任などの意味で解釈される。一方、非意志的な用法では、原因と責任に分けられている。

(6) 母親は子供に水を飲ませた。 【意志的用法】

(7) 私は自分の不注意で、子供に風邪を引かせてしまった。 【非意志的用法】

(高見 2011:131,135)

高見(2011)は、(6)の母親である使役者が、強制、説得、指示、許容・放任などの意志的

な行為で関わり、その結果として「子供が水を飲む」という事象が生じたと述べている。一方、(7) は、使役者は当該事象を意志的に生じさせたわけではないが、子供が風邪を引いたという好ましくない事象を引き起こしたのは、話者自身のせいであり、その責任を感じているという意味合いを持っている。

2.2. ?aoj に関する先行研究

2.2.1. 福田 (1977)

福田 (1977) では、?aoj の前に置かれる使役者の動作 (動詞) によって 2 つのグループが区別されている。一つ目のグループは常に ?aoj の直前に tvəə <する、作る>、nɔəm <連れる>、bɔndaal <引き起こす> のいずれかが共起するグループである。特徴として、これらの動詞は ?aoj との結び付きが緊密で、意味的にもその特立性は小さく、その独自の意味がほとんど認められないと福田 (1977) は述べている。このグループは以下のような構文で使用され、?aoj は必ず tvəə <する、作る> のような動詞の直後に続く。

- (I) A. 使役者 + tvəə / nɔəm / bɔndaal + ?aoj + 被使役者 + 動作
 - B. 使役者 + tvəə / nɔəm / bɔndaal + ?aoj + 動作 + 被使役者
 - C. 使役者 + tvəə / nɔəm / bɔndaal + ?aoj + 動作
 - D. 使役者 + tvəə / nɔəm / bɔndaal + ?aoj + 被使役者 + 形容詞
- など

二つ目のグループは、?aoj の前に bɔŋkɔəp <命令する>、bɔndaɔj <許す>、prap <伝える>、som <求める>、tuk <放置する>、praə <使用する> などの動詞が共起できるものである。このグループでは、共起する動詞は ?aoj との結合が緩やかで、意味的独立性が大きいと福田 (1977) は指摘している。なぜなら、被使役者は ?aoj の後ろだけでなく、当該の動詞と ?aoj の間に現れることもできるからである。I のグループと異なり、二つの語順が可能である。

- (II) A. 使役者 + bɔŋkɔəp / bɔndaɔj / prap + ?aoj + 被使役者 + 動作
- B. 使役者 + bɔŋkɔəp / bɔndaɔj / prap + 被使役者 + ?aoj + 動作

この二つのグループに関しては、?aoj に前置される動詞の意味的な特立性の相違について議論されているが、両者が意味的にどのような異なるかは考察されていない。また、II のグループで A と B の語順の間にどのような意味的差異が存在するかに関して、福田 (1977) は「要するに取り立てていっほどの相違はないと言ってよいのではなかろうか」と述べている。これに関して、上田 (2007) は批判的な立場を示しており、次の節で詳しく見ていく。

2.2.2. 上田 (2007)

坂本 (1989 : 269) では、?aoj の構文は <被使役者に行為をする意志を持たせる> の意味でのみ使用され、被使役者の動作が意志的でない場合には、例 (9) のように、?aoj 単独ではなく、tvəə ?aoj が用いられると述べている。

- (8) niəŋ pròəm ʔaoj kruupèet bəŋcuun niəŋ tən pñòmpeŋ
彼女 同意する ʔaoj 医師 送る 彼女 行く プノンペン
〈彼女は医師が彼女をプノンペンまで搬送させるのを承諾した。〉 (SPT) ^v

- (9) ʔae còmŋuu saot kəə tvəə ʔaoj kñom cuupsaa tənŋ klun praan
一方 病気 また も tvəə ʔaoj 私 痛む 全て 身体
〈病気もまた私の身体を苦しめた。〉 (PSP)

しかし、上田(2007:92)は、被使役者の動作が意志的でなくても、次の例(10)のように、ʔaoj 単独の構文が用いられることがあると指摘している。

- (10) kuo prap koon ʔaoj viə dəŋ ciəmunsaŋ
すべき 告げる 子 ʔaoj 彼 知る 先に
〈まずは、(あの子に告げて)彼に先に知らせるべきだ。〉 (JSR)

また、福田(1977)はʔaoj と被使役者との位置が異なっても「取り立てていっほどの相違はない」と主張しているが、上田(2007:93)は、ʔaoj の前に来るのは使役者の行為(直前の動詞)の目的語[N]で、ʔaoj の後に来るのは動作を実際に行う被使役者[N']であると指摘した。

- (11) a. bəŋkəm kəət ʔaoj tən
強制する 彼[N] ʔaoj 行く
〈彼に命じて(彼あるいは別の人に)行かせる。〉
b. bəŋkəm ʔaoj kəət tən
強制する ʔaoj 彼[N'] 行く
〈(彼あるいは別の人に)強制して彼に行かせる。〉 (モジュール使役)

上の(11a)のkəət〈彼〉は「強制する」という動詞の目的語であり、(11b)のkəət〈彼〉は「行く」の動作主を表す。ただ、[N]と[N']が同じ人物である場合は、特段の文脈がなければ、ʔaoj の前と後のどちらに位置してもニュアンスがあまり変わらない。[N]と[N']が異なる場合、以下の例のように、両者を明示的に言い表すこともできる。

- (11) c. bəŋkəm kəət ʔaoj koon kəət tən
強制する 彼[N] ʔaoj 彼の子供[N'] 行く
〈彼に強制して、彼の子どもに行かせる。〉 (モジュール使役)

(11c)では、省略された主語の「強制する」という行為を受ける目的語はkəət〈彼〉であるが、実際に「行く」という動作を行う被使役者はkəət〈彼〉でなく、koon kəət〈彼の子供〉である。

2.3. 先行研究の問題点

日本語の「サセル」については、外国語との対照研究は存在しているが、カンボジア語のʔaoj との対照研究は、筆者の知る限り存在しない。また、ʔaoj や tvəə ʔaoj について、先行

研究では、被使役者の意志性に関する指摘はあるが、使役者に関しては言及されていない。さらに、本稿冒頭で提示した (3) のように、*ʔaoj* が「サセル」ではなく、「～テモラウ」に対応すること、さらには、どのような場合に「サセル」に対応しないのかについては明らかになっていない。それゆえ、日本語とカンボジア語の使役に関わる対照研究を進めるためには、*tvəə ʔaoj* も含め、*ʔaoj* の意味特徴について解明する必要がある。

3. 日本語の「サセル」とそれに対応するカンボジア語の*ʔaoj*

安藤・小川 (2001) と高見 (2011) の見解を踏まえ、本稿では、「サセル」をまず意志的な用法と非意志的な用法に区別した上で、前者に含まれる意味機能を強制、許容・許可、放任・放置、説得、指示に、そして、後者に含まれる意味機能を原因・誘発、責任に細分し^{vi}、それぞれがカンボジア語の*ʔaoj* および *tvəə ʔaoj* とどのように対応するかを考察していく。なお、以下のカンボジア語の例文の頭に記した○は「対応する」＝「日本語と同じ意味機能を表す」、×は「対応しない」＝「日本語と同じ意味機能を表さない」ことを示す。

3.1. 意志的な「サセル」における対応

まずは、意志的な「サセル」がカンボジア語の*ʔaoj* または *tvəə ʔaoj* で表現できるかどうかを考察する。

3.1.1. 強制の意味機能

(12) 母親は、子供に嫌いな人参^{vii}を食べさせた。 (高見 2011:129)

- (13) a. ○ mdaaj (bɔŋkɔm) ʔaoj koon ɲam karot dæl koon sʔɔp
 母 (強制する) ʔaoj 子 食べる 人参 関係詞 子 嫌いな
 b. × mdaaj tvəə ʔaoj koon ɲam karot dæl koon sʔɔp
 母 tvəə ʔaoj 子 食べる 人参 関係詞 子 嫌いな

日本語の例 (12) では、「嫌いな人参」という表現から、子供が人参を食べたくないということが推量できる。したがって、使役者である母親が被使役者である子供の意志を無視し、無理矢理に食べさせたと解釈される。カンボジア語でも、*ʔaoj* を用いて (13a) のように表現した場合、文脈から無理矢理に食べさせたことが伝わる。さらに、*ʔaoj* の直前に動詞 *bɔŋkɔm* 〈強制する〉を付け加えて、強制の意味を明示的に伝えることも可能である。対象の文脈では、被使役者は動作の実行の決定権を持たない点で非意志的である。坂本 (1989:269) によると、そのような場合は *tvəə ʔaoj* が用いられるはずであるが、実際は、(13b) は日本語の (12) と対応しない。これは、*tvəə ʔaoj* においては、被使役者だけでなく、使役者も意志的でないことを示すからだと考えられる。先の例 (2) や (9) では、「使役者」はそれぞれ〈映画〉と〈病気〉で、いずれも無生物である。一方、(10) が示すように、被使役者が意志的でなくても、使役者が意志的である場合は、*tvəə ʔaoj* ではなく、*ʔaoj* が使われている。従って、(10) を以下のように *tvəə ʔaoj* に変えると不自然になる。

- (10*) * kuo prap koon tvəə ʔaoj viə dəŋ ciəmun sən
 すべき 告げる 子 tvəə ʔaoj 彼 知る 先に
 〈まずは、(あの子に告げて) 彼に先に知らせるべきだ。〉

3.1.2. 許可・許容の意味機能

- (14) 母親はレストランで子供に希望どおり、大好きなハンバーグを食べさせた。
 (高見 2011:130)

- (15) a. ○ mdaaj (ʔanupɲaat) ʔaoj koon ɲam buuɬkuuu dæl coolcətɬaŋ
 母 (許可する) ʔaoj 子 食べる ハンバーグ 関係詞 大好き
 taam bəmnəŋ koon nəv pòcəɲijətaan
 通り 希望 子 で レストラン
 b. × mdaaj tvəə ʔaoj koon ɲam buuɬkuuu dæl coolcətɬaŋ taam
 母 tvəə ʔaoj 子 食べる ハンバーグ 関係詞 大好き 通り
 bəmnəŋ koon nəv pòcəɲijətaan
 希望. 子 で レストラン

「希望どおり」と「大好きなハンバーグ」という表現から、子供が食べたいものを食べたことが含意され、使役者である母親がそれを許容ないし許可したと解釈される。この文に対応するカンボジア語の表現でも、ʔaoj を用いることができる。カンボジア語でも (15a) のように ʔanupɲaat 〈許可する〉を追加することでその意味機能を明確に表せる。(15b) が示すように、tvəə ʔaoj を用いると、許容や許可の意味ではなくなる。つまり、tvəə ʔaoj は意志的な「サセル」の用法である許可・許容には対応しない。

3.1.3. 放置・放任の意味機能

- (16) 甘えて泣いているだけだから、そのまま泣かせておけばいい。
 (安藤・小川 2001:31)

- (17) a. ○ kəət jòm cəŋ baan rəbəh tèt miən tæ (tuk) ʔaoj jòm taam nuŋ
 彼 泣く 欲しい 何か 終助詞 しかない (放置する) ʔaoj 泣く そのまま
 b. × * kəət jòm. cəŋ baan rəbəh tèt miən tæ tvəə ʔaoj jòm taam nuŋ
 彼 泣く 欲しい 何か 終助詞 しかない tvəə ʔaoj 泣く そのまま

(16) では、「そのまま」や「～ておけばいい」という表現から、使役者は被使役者が泣いていることを特に止めようとせず、そのまま放置することを表す。安藤・小川 (2001:31) は、日本語ではその意味を伝わりやすくするために「そのまま」「～テオク」などがよく一緒に使われると述べている。

それに対応するカンボジア語では、ʔaoj だけでも十分に対応するが、放置の意味を明示的に伝えるために、ʔaoj の前に tuk 〈放置する〉を付け加える。(17b) のような tvəə ʔaoj を用

いた例文は不自然である。tvəə ʔaoj は、使役者が切っ掛けで被使役者の変化が生じる構文である。放置・放任は、「泣いている」というすでに生じている事柄の邪魔をせず、その継続を認めるということであるため、(17b) は (16) に対応しないだけでなく、意味的にも不自然文である。

3.1.4. 説得の意味機能

(18) 妻は、お酒は身体に悪いからと、夫に酒をやめさせた。 (高見 2011:129)

(19) a. ○ prəpòn (naenɔəm) ʔaoj pðai còp pək sraa daoj nijəj taa
妻 (説得する) ʔaoj 夫 やめる 飲む 酒 理由 言う と
sraa mun lʔɔɔ sɔmrəp sakapiəp
酒 否定詞 良い ため 健康

b. × prəpòn tvəə ʔaoj pðai còp pək sraa daoj nijəj taa
妻 tvəə ʔaoj 夫 やめる 飲む 酒 理由 言う と
sraa mun lʔɔɔ sɔmrəp sakapiəp
酒 否定詞 良い ため 健康

説得の意味は、「被使役者があまりやりたくない」という点で強制の意味と共通する。(18)では、「お酒は身体に悪いから」という理由を挙げて被使役者にとって断酒が利益になると説得してそうさせたことを言おうとしている。ただ、状況が強制と類似しているため、説得であることを明確にするためには、naenɔəm〈説得する〉という動詞の追加が望ましい。また、使役者には意志性があるので、説得の「サセル」は tvəə ʔaoj と対応しない。

3.1.5. 指示の意味機能

(20) 母親は、子供に夕食前に遊びから帰らせた。 (高見 2011:130)

(21) a. ○ mdaaj (prap) ʔaoj koon trələpməɔk ptəh vɪn munpèel baajlɪjəc bəntəəppii
母 (指示する) ʔaoj 子 帰る 家 終助詞 前 夕食 から
ləeŋ nəv krav
遊ぶ で 外

b. × mdaaj tvəə ʔaoj koon trələpməɔk ptəh vɪn munpèel baajlɪjəc bəntəəppii
母 tvəə ʔaoj 子 帰る 家 文末 前 夕食 から
ləeŋ nəv krav
遊ぶ で 外

(20) では、使役者と被使役者の人間関係から、母親が子供に家に帰ってくるように指示さえすれば、子供が従うと考えられる。(20) が示すように、この意味機能に対応するのは ʔaoj のみである。やはり、tvəə ʔaoj とは対応しない。ʔaoj の直前に prap〈指示する〉がある場合、使役者の指示行為がより明確となる。

以上の考察から、意志的な「サセル」のさまざまな意味機能は ?aoj と対応するが、 $\text{tv\ddot{a}a ?aoj}$ とは対応しないことが分かる。これは、使役者が意志的な場合は ?aoj のみが可能で、一方、 $\text{tv\ddot{a}a ?aoj}$ は使役者および被使役者が無意志的な場合に限られるからだと考えられる。日本語の「サセル」には、非意志的な用法もある。このような用法では、逆に、 ?aoj ではなく、 $\text{tv\ddot{a}a ?aoj}$ と対応することが予測されるが、果たしてどうだろうか。次節では、非意志的な「サセル」の意味機能とカンボジア語の ?aoj および $\text{tv\ddot{a}a ?aoj}$ との対応を考察する。

3.2. 非意志的な「サセル」における対応

3.2.1. 責任の意味機能

(22) 私は自分の不注意で、子供に風邪を引かせてしまった。(高見 2011:134)

(23) a. $\times$ * $\text{k\ddot{p}om ?aoj koon pdasaaj daoj kaatv\ddot{e}ehpr\ddot{o}haeh r\ddot{o}b\ddot{o}h k\ddot{p}om}$

私 ?aoj 子 風邪 理由 不注意 の 私

b. $\bigcirc$ $\text{k\ddot{p}om tv\ddot{a}a ?aoj koon pdasaaj daoj kaatv\ddot{e}ehpr\ddot{o}haeh r\ddot{o}b\ddot{o}h k\ddot{p}om}$

私 $\text{tv\ddot{a}a ?aoj}$ 子 風邪 理由 不注意 の 私

(22)の使役文では、親が「子供が風邪を引く」という事象を意図的に引き起こした訳ではない。主語である「使役者」自身は直接的な原因でないとしても、好もしくない事柄が発生してしまい、その事柄の発生を食い止められなかった責任を感じていることを伝える。このような事態が発生したことで当該の人を非難する意味合いが生じることもある。責任を表す「サセル」をカンボジア語に対応させる際は、 ?aoj のみでは表現できず、 $\text{tv\ddot{a}a ?aoj}$ を用いなければならない。上の(22)では、「不注意で」という表現があるため、意志的な ?aoj と意味的に整合しないため、不自然になる。このように責任の用法では、使役者も被使役者も意図的・意志的に事象の発生に関わったわけではないため、 $\text{tv\ddot{a}a ?aoj}$ しか対応しない。

3.2.2. 原因・誘発の意味機能

(24) 医者の不注意な一言が、患者をがっかりさせた。(高見 2011:133)

(25) a. $\times$ * $\text{pi\ddot{a} ?s\ddot{o}md\ddot{a}i munpr\ddot{o}ngpr\ddot{o}jat r\ddot{o}b\ddot{o}h v\ddot{e}cc\ddot{e}abandut ?aoj n\ddot{e}a ?c\ddot{o}m\ddot{g}uuu k\ddot{o}a ?c\ddot{a}t}$

一言 不注意 の 医者 ?aoj 患者 がっかりする

b. $\bigcirc$ $\text{pi\ddot{a} ?s\ddot{o}md\ddot{a}i munpr\ddot{o}ngpr\ddot{o}jat r\ddot{o}b\ddot{o}h v\ddot{e}cc\ddot{e}abandut tv\ddot{a}a ?aoj n\ddot{e}a ?c\ddot{o}m\ddot{g}uuu k\ddot{o}a ?c\ddot{a}t}$

一言 不注意 の 医者 $\text{tv\ddot{a}a ?aoj}$ 患者 がっかりする

(24)の「サセル」文では、主語の「使役者」は意図的に行為を行った訳ではない。主語「医者

因・誘発の用法においても、ʔaoj は対応せず、tvəə ʔaoj のみが対応する。

以上の考察から、無意志的な「サセル」の意味機能は、ʔaoj のみで表すことはできず、予測通り、無意志性を表す tvəə ʔaoj を用いなければならないことが明らかとなった。本稿の冒頭で、何かをうっかり落とした場合は、tvəə ʔaoj と tleak 〈落ちる〉を組合せて表現すると指摘したが、これは tvəə ʔaoj が無意志的であるからである。さらに、無意志的な場合の「落とす」は、カンボジア語では、直訳すると、「落ちさせる」と言い表しているのである。

3.3. 「サセル」の意味機能とそれに対応するカンボジア語の表現のまとめ

「サセル」とカンボジア語の表現との対応関係をまとめると、次の表 1 のようになる。

表 1 「サセル」構文における対応関係

「サセル」の意味機能	カンボジア語の表現	
① 意志的な用法	ʔaoj	tvəə ʔaoj
強制	○	×
許可・許容	○	×
放置・放任	○	×
説得	○	×
指示	○	×
② 非意志的な用法		
責任	×	○
原因・誘発	×	○

表 1 から、日本語の「サセル」は意志的な用法も非意志的な用法も表すのに対し、カンボジア語のʔaoj と tvəə ʔaoj は意志性に応じて棲み分けられていることが分かる。具体的には、ʔaoj は意志的な用法と、tvəə ʔaoj は非意志的な用法と対応する。さらに、日本語の「サセル」のいずれの意味機能も、ʔaoj または tvəə ʔaoj のどちらかが対応することが分かる。

[使役者＋ʔaoj／tvəə ʔaoj＋被使役者＋動作]の構文について、坂本(1989)と上田(2007)では被使役者の動作に注目し、その動作が意志的である場合にʔaoj、その動作が非意志的である場合に tvəə ʔaoj を使用すると述べられている。しかし、jòm 〈泣く〉のような非意志的な動詞について、tvəə ʔaoj だけでなく、ʔaoj でも容認可能である。ただし、これらはニュアンスが異なる。

(26) a. kəət baan tvəə ʔaoj kɲom jòm

彼 過去 *tvəə ʔaoj* 私 泣く
 〈彼が私を泣かせた。〉

b. *nəv vèə nih* *nèə dək nœm* *baan* (*prap*) *ʔaoj* *tuo srəi jòm*
 このシーンで 監督 過去 (指示する) *ʔaoj* 女優 泣く
 〈このシーンで監督が女優に泣くように指示した。〉

「泣く」は非意志的動詞であるため、(26a)のように、*tvəə ʔaoj* が用いられている。さらに、使役者の「彼」も意志的に使役行為を行ったというのではなく、彼の何らかの行動や言動が原因となって「私が泣く」という事柄が発生したことを表す。一方、*ʔaoj* を使った (26b) では、使役者である監督が被使役者である女優に泣くように意志的に指示したことに加え、被使役者の女優も演技として意志的に泣いたことを表す。つまり、「泣く」という動詞の無意志性よりも、*ʔaoj* の意志性が優先されている。

李 (2016) は、使役文の働きかけと結果性を中心に考察し、使役文における結果キャンセルの成立は使役者の意志性がある場合に限定されると主張している。

- (27) a. 弟に頼んで窓を開けさせたけど、開かなかった。 【意志的用法】
 b. 遊びたがる子供に遊ばせたけれど、遊ばなかった。 【意志的用法】
 (28) a. *父親は戦争で息子を死なせたけど、息子は死ななかった。 【非意志的用法】
 b. *冷蔵庫でバナナを腐らせてしまったけど、腐らなかった。 【非意志的用法】
 (李 2016:75)

ソック (2023) が論じたように、動作の意志性と結果性は連動する。具体的には、動作が意志的であれば、どのように行われたかに焦点が当たり、結果が背景化するのに対し、非意志的な動作であれば、非意志的であるが故、それがどのように行われたかは注目されず、結果が前景化する。カンボジア語においても、意志的な *ʔaoj* は、使役者の行為の様態 (指示、強制、許可、放任) に注目する。一方、非意志的な *tvəə ʔaoj* は、被使役者の動作の結果に注目する。そのため、ソック (2023) が指摘したように、*ʔaoj* は結果キャンセル構文と共起できるが、*tvəə ʔaoj* は共起できない。

- (29) *mdaaj ʔaoj koon ʔam karot pontae koon mun ʔam*
 母 *ʔaoj* 子 食べる 人参 しかし 子 否定 食べる
 〈母は子供に人参を食べさせたが、子供が食べなかった。〉

- (30) * *kɲom baan tvəə ʔaoj ʔaaw prə'laʔ haaj pontae viə mun prə'laʔ*
 私 過去 *tvəə ʔaoj* 服 汚れる 完了 しかし あれ 否定 汚れる
 〈私はシャツを汚した (←汚れさせた) が、汚れなかった。〉 (ソック 2023:135)

日本語の「サセル」は同じ形式で意志がある場合とない場合の両方を表し、意志性の有無は文脈によって解釈される。そのため、結果キャンセル構文が可能かどうか文脈に依存する。一方、カンボジア語では、意志がある場合に *ʔaoj*、意志がない場合に *tvəə ʔaoj* が用いられ、両者は明確に区別される。次の章では、*ʔaoj* と *tvəə ʔaoj* のこのような意味的な相違がな

ぜ生じているのかを考察し、説明を試みる。

4. ʔaoj と tvəə ʔaoj の意味特徴

これまで述べてきたように、ʔaoj と tvəə ʔaoj はカンボジア語の使役表現として用いられる。そして、両者は、使役者の意志性が異なることが明らかとなった。また、それに相関して、ʔaoj は使役者の動作の様態（指示、強制、許可、放任）などに注目する一方、tvəə ʔaoj は事柄を引き起こしたことに注目すると指摘した。両者の違いを生み出しているのは、tvəə の有無であることは疑いない。本章では、このことがʔaoj と tvəə ʔaoj の意味特徴の相違とどのように関係するかを考察する。

まず、結果と様態の関係を観察する。出水 (2018) は、架空の小説におけるセリフとして、以下のような例文を挙げた。

- (31) a. 「8 月 21 日の午後 3 時に、犯人は被害者を殺したのだ。」
 b. 「8 月 21 日の午後 3 時に、犯人は被害者を殴ったのだ。」 (出水 2018:1)

出水 (2018) の解説では、(31a) の「殺した」は被害者が死んだという結果を含意するが、犯人がどのように被害者を殺したかは不明である。「殺す」のような結果動詞では様態が未指定だと述べている。一方、(31b) の「殴った」は、犯人が被害者にどのようなことをしたかを表すが、被害者がどうなったか、つまり、まだ生きているのか死んでいるのかは不明である。「殴る」のような様態動詞では結果が未指定だと主張している。

tvəə は、語彙的な動詞としては〈する、作る〉を意味する。例えば、mhop 〈料理〉や kaanjə 〈仕事〉などの名詞を目的語として伴い、tvəə mhop 〈料理を作る／料理する〉や tvəə kaanjə 〈仕事をする〉のように使われる。どのように料理を作るか、どのように仕事をするかは言及しない。カンボジア語の tvəə は、日本語の「スル」や英語の do のように具体的な内容をもたない動詞である。tvəə 自体は〈何かをした〉ことを意味するだけで、動作主がどのようにしたのかを述べない。すなわち、具体的な動作の様態に言及せず、ただ何かが発生したという結果だけを表す。つまり、tvəə は様態動詞でなく、結果動詞としての意味特徴を持っていると言える。それゆえ、ʔaoj の直前に位置することで、その文の結果、つまり、被使役者に関する事態が発生したことが注目され、それに伴って、非意志的な意味を担っているのではないかと考えられる。

では、ʔaoj だけの場合、なぜ意志的な使役に解釈されるのだろうか。先に指摘したように、意志的な動作においては、結果よりも動作やその様態が注目される。ということは、ʔaoj のみの使役文では、使役者の動作の様態が注目されていることになるが、実際にそうだろうか。もしそうであるなら、なぜʔaoj は様態動詞として振る舞うのだろうか。

Haiman (2011) は Cheshirization の概念を導入して、ʔaoj の意味や構文の変化を説明している。Cheshirization は次のように定義されている。

Cheshirization :

The mechanism of dropping essential (core, central, main) words as long as the meaning that they convey is adequately conveyed by incidental (peripheral) words which thereby become “essential” themselves. (Haiman 2011:327)

Haiman (2011) の例を用いて、Cheshirization がどのような現象を指すかを説明しよう。

- (32) kɲom dəŋ ciə miən pèel riəpɔm tən ruu ʔət tən
私 知る 有る 時 準備する 間に合う それとも 否定 間に合う
tèe (Haiman 2010:326)
否定

〈準備する時間があるかどうかは分からない。〉

(32) は、表面上は肯定文であるが、〈分かった。〉の意味ではなく、〈分からない。〉という否定文の意味を表す。通常であれば、動詞の前に mun 〈否定〉を置いて否定文であることを示さなければならない。ところが、dəŋ ciə という言い回しは否定文でしか現れないという制限があるので、mun 〈否定〉が省略されても否定であることが伝わる。

このような Cheshirization の観点から、第3章における日本語の「サセル」文からカンボジア語に翻訳された文を観察していく。これらの例文では、意志的な用法の「サセル」と対応する ʔaoj の直前に bəŋkəm 〈強制する〉、ʔanuppaat 〈許可する〉、tuk 〈放置する〉、naenɔəm 〈説得する〉、prap 〈指示する〉が生起することがある。Haiman (2010) が論じているように、カンボジア語の ʔaoj 単独による使役文は、実は、このような動詞が省略され、Cheshirization によって、ʔaoj がさまざまな使役の意味機能を表すことができると考えられる。省略された動詞は意志的であり、それゆえ、ʔaoj 単独の使役文も意志的な用法しか持たないことが説明できる。

以下の (33) が示すように、依頼の場面において、カンボジア語では aoj を使用することができるのに対し、日本語では、(34a) が示すように「サセル」使役文は不自然であり、(34b) のように「～テモラウ」が使われる。なぜカンボジア語と日本語の使役文においてこのような相違が生じるのだろうか。

- (33) cam (kɲom) (puŋ) ʔaoj raət bəŋriən (= (3))
待つ (私) (頼む) ʔaoj ロット 教える
[直訳] 〈ロットさんに(頼んで) 教えさせようかな。〉

(34) a. ? ロットさんに頼んで教えさせようかな。

b. ロットさんに頼んで教えてもらおうかな。

ベトナム語でも同様の現象が観察されることがグエン (2014) で言及されている。グエン (2014:245) は、使役者が被使役者に依頼して何らかの行為をさせるベトナム語の構文は、

「サセル」より、日本語の「～テモラウ」に対応すると主張している。「依頼」が「サセル」の意味機能に含まれていない理由は、「依頼」の意味自体にその答えがあると考えられる。

「依頼」は他者にお願ひし、その他者が依頼者の願ひを聞き入れて自ら行動し、その好意のお陰で依頼者が利益を得るということを表す。日本語においては、他者から利益を受けた際に、授受動詞を用いて恩恵や感謝の気持ちを伝えることが重要視される。その状況で、他者に何かを「サセル」ことは、恩恵が伝わらないばかりか、他者の意志を重んじない上の立場からの行為と取られ、失礼な印象を与えることにもなり得る。

一方、カンボジア語では、強制、許可・許容、放置・放任、説得、指示を意味する動詞に加え、〈頼む〉 *puŋ* という動詞も *ʔaoj* と一緒に用いられる。先ほど論じたように、カンボジア語の *ʔaoj* はそれ自体が元来、使役を表すものではなく、直前の動詞が省略され、Cheshirization によって、使役的な意味を表すようになった。それゆえ、*ʔaoj* の使役としての意味機能は、直前の動詞の意味に依存し、いわば派生的な使役だと言える。それに対し、日本語の「サセル」は、もとより使役を表す要素であり、使役者は被使役者が動作を実行できるかどうか決める「権限」や「力」を持ち、典型的な使役を表すと言えるだろう。

5. まとめと今後の課題

本稿で、日本語の「サセル」とカンボジア語の *ʔaoj* および *tvəə ʔaoj* を対照させながら考察し、以下のことを明らかにした。

1. 「サセル」は使役者の意志がある場合でもない場合でも使われる。意志性の有無は文脈によって判断される。一方、カンボジア語では、使役者の意志がある場合に *ʔaoj* のみを、意志がない場合に *tvəə ʔaoj* を用いて明示的に区別される。
2. [使役者+*ʔaoj*+被使役者+V] の語順においては、*ʔaoj* の前に使役者の具体的な行為内容を示す動詞を置くことが可能である。単独での *ʔaoj* が使役者の動作の様態（指示、強制、許可、放任、説得）を伝えることができるのは、元々この文構造において当該動詞が存在していたためだと考えられる。Cheshirization によって、これらの様態動詞が省略されて使役的な意味を表すに至った。
3. *ʔaoj* の前に、指示、強制、許可、放任のような動詞だけでなく、依頼のような動詞が付くことも観察される。その場合、日本語では「サセル」よりも「～テモラウ」の方が自然である。

本稿では、使役表現における「サセル」が *ʔaoj* や *tvəə ʔaoj* とどのように対応するかを中心に考察したが、次の例のように、*ʔaoj* を「サセル」に対応させると、日本語として不自然になる場合がある。

- (35) a. *som* *baek* *cəŋ* *ʔaoj* *bəŋ* *luoŋ*
 依頼 別れる ～たい *ʔaoj* 彼氏 なだめる
 〈別れたいと言ったのは彼に宥めてもらうためです。〉

b. coolcət ʔaoj kèe səsəə cèəcìəŋ bəŋʔap

好き ʔaoj 誰か 褒める より 貶す

〈貶されるより褒められる方が好きです。〉

c. prəjat kom ʔaoj tviə kiəp dai

注意 否定 ʔaoj ドア 引き込む 手

〈手を引き込まれないようにご注意ください。〉

このようなʔaojの使われ方は、従来の研究であまり指摘されていない。上のような例では、使役の「サセル」よりも、受身の「ラレル」によって表現するのが相応しいものがある。しかしながら、これらの文をカンボジア語の受身表現 trəw^{viii}で言い換えることはできない。なぜʔaojで表現されるのか、さらに、日本語の「ラレル」とカンボジア語の trəw はどのような対応を見せるのかを考察する必要がある。この点については今後の課題としたい。

参考文献

- 安藤節子・小川誉子美(2001)『日本語文法演習 自動詞・他動詞、受身、使役 ―ボイス―』、スリーエーネットワーク
- 上田広美(2007)「クメール語の使役表現について」『東外大東南アジア学』12、pp.90-97、東京外国語大学東南アジア語学科
- 上田広美(2009)「クメール語の受動表現について」『語学研究所論集』14、pp.113-123、東京外国語大学語学研究所
- グエン・ティ・アイ・ティエン(2014)『日本語とベトナム語における使役表現の対照研究 ―他動詞、テモラウ、ヨウニウとの連続性―』、博士論文、大阪大学
- 坂本恭章(1989)『カンボジア語入門』、大学書林
- 坂本恭章(2001)『カンボジア語辞典』(上・中・下)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- ソック・ソワンロッター(2023)「事象キャンセルについて―日本語とカンボジア語の対照研究―」『日本語・日本文化研究』33、pp.129-142、大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻応用日本学コース
- 高見健一(2011)『受身と使役 その意味規則を探る』、開拓社
- 出水孝典(2018)『動詞の意味を分解する―様態・結果・状態の語彙意味論―』、開拓社
- 福田健一(1976)「カンボジャ語の受動文について」『中京大学文学部紀要』11-1、pp.1-21
- 福田健一(1977)「カンボジャ語の使役文について」『中京大学文学部紀要』12-1、pp.71-93
- 李仙花(2016)「無標の動詞文・テモラウ文・使役文にみる結果性」『東北大学文学研究科研究年報』66、pp.88-68

- Corre, Eric. (2021). “Aoj ‘give’ in Khmer,” in M. Bouveret, ed. *Give Constructions Across Languages*, John Benjamins, pp.147-173
- Haiman, John. (2011). *Cambodian: Khmer*, John Benjamins

参考ウェブサイト

東京外国語大学言語モジュール「カンボジア語 文法 使役：解説」

<https://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/km/gmod/contents/explanation/039.html>

本文中では、「モジュール使役」と省略して記す。

(最終閲覧：2024年8月20日)

東京外国語大学言語モジュール「カンボジア語 文法 受身：解説」

<https://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/km/gmod/contents/explanation/041.html>

(最終閲覧：2024年8月20日)

注

- i カンボジア語は独自の文字を持つ。本稿では、坂本（2001）を参考にして IPA（国際音声記号）を用いてカンボジア語を表記する。また、ラテン文字転写されたカンボジア語の例を引用する際も、本稿の表記法に変えて引用する。
- ii tomleak と tvəə ʔaoj tleak の相違点や他の意味特徴については、坂本（1989）やソック（2023）を参照されたい。
- iii 本稿で用いる例文には、小説や先行研究からの引用の他に筆者の作例が含まれる。出典が明記されていない例文はすべて筆者の作例である。
- iv cam は直訳すると〈～まで待て〉であるが、日本語では〈じゃ、今（から）～してあげる〉のような意味合いになる。cf. 坂本（1989:365）。
- v ここでの略号は、坂本（2007）が現代小説を資料として使用した出典を表している。JSR:Lek, Rary 1967 *Jati satri* 『女性の人生』、PSP:Nu, Hac 1960 *Phkaa srabon* 『萎れた花』、SPT:Rim, Kin 1965 *Sophat* 『ソパート』。
- vi 安藤・小川（2001）における許可、放置、誘発と高見（2011）における許容、放任、原因を次のようにまとめる。許可と許容は、被使役者の行動や要求を認めるという点で共通している。放置と放任は被使役者に干渉せず、そのままにしておくという点が近似している。誘発と原因は、被使役者の行動や反応を引き起こすという共通点を持つ。それゆえ、これらを許可・許容、放置・放任、原因・誘発にまとめた。
- vii 3.1 節と 3.2 節の例文に下線を付けした表現は、使役者が被使役者にどのように働きかけるかに関する手がかりとなっている。例えば、(14) では、「希望どおり」というフレーズがあるため、使役者の行為は許可だと判断される。
- viii カンボジア語の受身表現には、[受身の主語＋trəw＋動作主＋動詞] という形が用いられる。東京外国語大学言語モジュールでは、カンボジア語では受身表現があまり使用されず、その代わりに能動文の形で表現されると説明されている。